

William T. Vollmann, *Rising Up and Rising Down: Some Thoughts on Violence, Freedom and Urgent Means*

査読書

2007年9月17日

山形浩生

Executive Summary

作者ヴォルマンが、過去20年にわたって集めた暴力に関する考察。暴力や殺人が正当化されるべきケースについての道徳的な規範を構築しようとした力作。本の前半では、道徳律構築の方法論、後半の第二部は、前半で参照されている世界各地の事例(聞き書き)集。

ある程度の普遍性を持つ道徳律構築を目指したものであり、その材料はヴォルマン以外では考えられないほどの多岐にわたる。しかしその一方で、一般性を目指しすぎたためにあまりに議論が細かくなりすぎ、留保なども多く、最終的にできた道徳律は77ページにもわたる。実際に人々が自分の行為の道徳的判断に使えるものにはなっていない。また700ページもの大冊なのに、結論に意外性はなく、だれでも漠然と抱いている常識を細かく場合分けしただけの感はある。

書き方、暴力否定に対する口ごもった物言いなどを見ると、むしろ本書はヴォルマン自身が自分の暴力(の見物)好きを肯定したい(つまりいいものもあるんだからと言いたい)がために書かれたのではないか。そうした本当の意図と表面的な意図とのよじれもあってか、理論書としての切れはわるく、細かく分岐する重箱の隅的な例外論をしつこく追う議論が多いために見通しがあまり持てない。エピソードも論点が明確ではなく、だれるのは否めない。訳出は労多くして報われないであろう。

1. あらすじ

作者ヴォルマンが、過去20年にわたって集めた暴力に関する考察。アフガニスタンやボスニアなどに赴き、暴力や殺人はいけないこととされるが、現地の人々が侵略や攻撃に対して蜂起するのはだれが考えても正当化されることである点に気を止めて、暴力や殺人が正当化されるべき道徳的な規範を構築しようとしている。本の前半では、道徳律構築の方法論、その際の「正しさ」の置き方といった点から始まって、実際にその道徳律を構築するまでの各種考察、および実際に完成した道徳律、後半の第二部では、前半で参照されている世界各地の事例(聞き書き)の羅列となっている。もとは全7巻にわたる大著だったが、それを要約したものである(それでも800ページ近い)。

2. 作者

ウィリアム・T・ヴォルマンはアメリカ現代小説の中堅の一人。娼婦やギャングなど、社会の周縁に暮らす人々をテーマにした、現代社会の猥雑さを背景とした個人の疎外感を主題にした作品、あるいは現代史から取りこぼされた別の歴史の物語、タイ、アフガニスタンなど世界のトラ

ブル地域をめぐる、ルポとも小説と もつかない各種作品などで知られる。邦訳に『蝶の物語たち』『ハッピーガールズ、バッドガールズ』『ライフルズ』など。

3. 内容詳細

はじめに

暴力はどんな場合に正当化されるのか？ それが本書のテーマである。

死をめぐる三つの随想

- カタコンベにでかけて、自分も死ぬのだという思いを新たにしたこと。
- 少年時代に遭遇した自分の妹の死に関する随想とからめて、警察の死体置き場で死の意味をめぐる断想
- カンボジアのキリング・フィールド、コソボ、各種の戦場などの大量死をめぐる断想

序文

いままも暴力は大量に存在する。世界はよくなっていると言いたいところだが、内戦や残虐行為や売春宿や低賃金労働があって本当によくなっているとは自信をもっていえない。しかし暴力が正当化される場合も確実に存在する。それを整理することで道徳や倫理と暴力との折り合いもつけやすくなるのではないか。

それを行う場合に、客観性とは何か、正義とは何かについて前提となる考察を行う。

第一部

1. 孤独な原子たちのための定義

暴力に使われる道具（銃、ナイフ）。これはセキュリティ、自立性、力を与えてくれる。こうしたものを考えつつ、暴力が正当化される場面の背景となる道徳律をどう考えるべきかについての考察。暴力が使われたとき、それが「正しい」ことだったかをどう判断すればいいのか？ 結果論か、意図か、行為自体の善良さか？ これを、ルター的な正義の考え方と組み合わせ、暴力や殺人が認められるべき場合をみわける前段としている。

2. 正当化: 正当防衛

殺人や暴力が容認されそうなケースとしてだれでも思いつくのは、正当防衛や自衛の場合。各種の事例でも、暴力の正当化にはほぼ確実に出てくる。だが何を守ろうとするのか？

- 名誉を守るため（日本の平家物語などの事例）という場合でも、名誉には各種のタ

イブがあることがわかる。ナポレオンは戦争の正当化にフランスの名誉を守る、というのを持ち出した。

- 階級を守る、というのもある。階級は職能や資産などいろいろなものの代替指標でもある。ロシア革命は、ブルジョワ階級を倒すと同時にプロレタリア階級を守るというものでもあった。
- 権威を守る、というのもある。これは国防などで、国としての権威を守るのだ、という形で持ち出される。
- 立場を守る、というのもある。

3. 正当化:政策や選択

- 抑止、復讐は、しばしば暴力の正当化として使われることが多い。
- 罰として暴力を行使することもある。実際、死刑などはまさにそうしたものの。

4. 正当化:運命

- 殺し合う運命にあるのだ、宿命だったのだ、という正当化もある。

5. 評価

もちろん正当化がすべて額面通り受け取られるわけではない。暴力や殺人は、それがどう評価されるかによっても変わってくる。

6. 道徳律

これまでのまとめ。真理探究の方法、道徳律はいかに形成すべきか、そしてそれに基づいて殺人が正当化される場合の整理。

間奏

世界中でみんな暴力や殺人を嫌うのに、武器を持つ人はなぜかくも楽しそうなのか？

第二部

世界各地からの正当化されそうな/されなさそうな暴力や殺人行為のケーススタディ。ベトナム戦争のベトナムゲリラの話、ボスニアでの物語など、各種の聞き書き集。

4. 評価

ウィリアム・ヴォルマンが20年がかりで書き上げた、7巻にわたる暴力研究の集大成の要約版である。そこに取り上げられた事例や各種の学者・思想家による考察の整理はきわめて広範であ

り、聞いたこともない世界の無名人の物語と、ヴォルマン自身の個人的な体験とが交錯する語り口は独特のものであり、味わい深い。

しかしながら、力作にはちがいないものの、一通り読んだところで読者としてはいささか途方に暮れざるを得ない。暴力はいかなる場合に正当化されるか、という道德律を構築するのはよいが、これはまったく使い道がない。暴力をふるおうとするとき、事前にこれを参照して「おれの暴力はこの2.2.5.10項に該当するからいいのだ」といった判断を下す人間などいるわけがないし、また事後的には、ふるわれた暴力はふるわれたのであり、それが正当化できるかどうかをこの道德律を参照して考えようとする人も考えにくい。特に、その完成した道德律がそれだけで77ページにもわたるとなればなおさらである。

そしてその77ページにも革新的な知見があれば意義はあるだろうが、それも特に見られない。ある程度の普遍性を持つ道德律構築を目指したものであり、その材料はヴォルマン以外では考えられないほどの多岐にわたる。しかしその一方で、一般性を目指しすぎたためにあまりに議論が抽象的となり、留保なども多く、最終的にできた道德律は77ページにもわたる。実際に人々が自分の行為の道德的判断に使えるものにはなっていない。またきわめて多岐にわたり、全7巻もの著作の要約として700ページもの大冊であるのに、結論にあまり意外性はなく、だれでも漠然と抱いている常識を細かく場合分けしただけの感はある。

途中の間奏部分での写真などを見ても、また各地の戦場に好きこのんで出かけていく嗜好を見ても、ヴォルマンは明らかに（口ではなんとおおうと）暴力が好きであり、それに大いなる魅力を感じている。おそらくヴォルマンのすべての本がそうであるように、この本もヴォルマンのきわめて私的な自分だけの問題意識に込めることだけを念頭においている。かれは自分の暴力（の見物）好きを何とかして正当化したいがために、暴力は一部の場合には必ずしも悪くないのだ、したがってそれに魅力を感じてもかまわないのだ、という理屈を作ろうとしているように思える。

その試み自体は興味深いものであり、またしばしば暴力に魅力を感じてしまう一般人にとっても決して無縁なものではない。しかし、本当の意図と表面的な意図とのよじれもあつてか、理論書としての切れはわるく、細かく分岐する重箱の隅的な例外論をしつこく追っている場面が多いために見通しがあまり持てない。エピソードも論点が明確ではなく、だれるのは否めない。訳出の意義はあまりない。